

■連続公開講演会より

## ヒンドゥー教と女性

ヒンドゥー教における母親のイメージについて

サンディップ・K・タゴール

皆様、こんばんは。皆様にお会いすることができて非常にうれしく思っております。主催者より、インドの女性についてお話をするようとの依頼がありましたので、お受けさせていただきました。本日は、特にインドの女性、あるいはヒンドゥーの中での母性、「母」に焦点を絞ってお話をさせていただきます。

と思います。私は父親でしかありませんので、そういう意味では非常にマイノリティーな存在であろうかと思います。日本を見ても、日本誕生の歴史の最初の部分を思い起こせば天照大神という女神から始まっています。

日本の子供たちの守り役は、ご存じのようにお地蔵様です。しかし、このお地蔵様は、もともと日本のものではなくインドから来たものです。クシティーガルバーというのが、お地蔵様のもともとの正式な名前です。

母親というのは非常に重要な存在であります。ここに「出席の皆様のほとんどがお母さんでいらっしゃる

### 一 母親を象徴する神

このお地蔵様の正式な名前、クシティーガルバーのクシティー、最初の半分は大地という意味で、ガルバーといふのは子宮を意味しております。そういう意味では、お地蔵様は実は女性であるともいえるわけです。アルダナリシュワルというヒンドゥー教の一人の神がおります。この神、アルダナリシュワルは半分男性、半分女性です。インドに行くと、このアルダナリシュワルの彫像や絵をたくさんあちこちで見ることができます。

その半分はシーヴァという男性の神、もう一つのほうがその妻であるドゥルガ、あるいはウーマを意味するところです。これはつまり、お父さんとお母さんということです。

中国でも同様にクワンニンという神がいます。これは日本では観音と呼ばれており、英語では「観音」のことを「慈悲の女神」と訳されています。すなわち、どういうことを意味しているかといいますと、母という存在は慈悲、カルナともいいますが慈悲を持っている存在であるということです。

あるキリストよりも、むしろマリアのほうに重きを置くということもあります。歴史を遡り、かなり昔に話を進めたいと思います。これはプリヴェディックの時期（前ヴェーダ期）、ヴェーダの前の時代で、西暦では紀元前二〇〇〇年以上前のことです。日本の方々はいろいろなところに海外旅行に行かれていると思いますが、古代の歴史といいますか、文化・文明の栄えていたようなところに行きたないと考える人々もたくさんおられるのではないかと思います。例えば、エーゲ海とかペルシャとかメソポタミア、あるいはカスピ海の辺り、シリア、アラビア、あるいはキプロスの辺り、あるいはバルカン半島、エジプト、中国の一部等々、本当にそういう小アジアの地域とか、古代の文明があつたところに行つてみると、どこにでも何百というたくさんの母親を意味するようなものが残っていることがおわかりいただけます。

人はすべて子供であり、子供はすべて母親に生涯ずっと守られ続いている存在であります。母親のとめどもない慈愛に守られていくわけであります。ですから

すなわち、相手に対する溢れるような思いやりや慈悲を持つているとする女性らしさ、それが母親の象徴であったということです。そしてまた、完全な最高のバランスということも意味しております。陰のない陽、陰のない善、あるいは白のない黒というのはあり得ない。すなわち、両方がお互いに寄りかかりながら、依存し合いながら存在している。これは、宗教あるいは哲学の領域だけで何か示唆されているものでは決してなく、私たちの毎日の生活の中にもこれは真理として存在しているものであります。

その人間という存在、これも完全な人間を求めるならば、女性の中にのみ母の中にのみ見出すことができるのです。すなわち、母という存在、母という姿が完璧である、完全であるということです。こういう考え方には別にヒンドゥーの考え方だけではなく、この地球にあるすべての国、すべてのエスノーセンタリック（民俗文化中心）にすべて存在する考え方であります。

例えば、キリスト教のカトリックを見ても、男性で

当然、その「母」という存在が完全な存在であり、姿であるとして女神となり、また、絶対なる神としてあがめられていくようになつたことが、すべての宗教において起きいていても当然であると考えられると思いました。

インドには多くの宗教が入ってきました。しかし、ヒンドゥーはヒンドゥー教独自の歴史を持っていません。ほかの宗教はすべて歴史を持つていていますが、ヒンドゥーにはいつから始まつたかという歴史はありません。インドにおけるヒンドゥーにはヒンドゥー教もあれば仏教、ジャイナ教、セクリズム、キリスト教というありとあらゆる宗教が入り込んでいるものであります。

ですから、本当にいま敬虔なヒンドゥーの信者の人たち、信仰している人たちは、それらすべてがヒンドゥーであるというふうに素直にとらえています。世界各地を見ても、では、ヒンドゥーというのは一体どういうものなのか、あるいは、ヒンドゥーはどういう人なのか、というふうに問い合わせられることがあります。

す。

それに対する答えとして申し上げることができるの  
は、ヒンドゥーというのはすべてのものを受け入れる  
ことのできる人であるということです。まさに、この  
証拠となるのは、これまでの人類史を振り返ってみて  
も、インドという国は決して他国を侵略したことのな  
い唯一の国だということです。一つだけ例外的なケー  
スがありまして、それは約千年前にインドの地にイス  
ラムがやつてきたときのことです。

当時の王がそれに対しても軍隊を送ろうとして、  
攻めるような指揮をとったのです。そして、送られ  
た軍隊の人たちはヒマラヤを越えて中国のほうに戦い  
に行こうとしたのですが、ご存じのようにヒマラヤ山  
脈は非常に寒くて雪や氷で覆われているので、登ろう  
とした兵隊たちはみんな寒くて冷たくて、氷にツルツ  
ルと滑ってしまって上に上がれずインドの地に戻って  
しまったのです。

これは歴史上の事実ですが、冗談混じりにインドは  
他国を攻めたことがない国であることを強調するとき

に使われます。インドという国は何千年の長きにわた  
って平和を愛する姿勢をずっと保ち続けてきた国であ  
るということがいえます。

## 二 ドウルガ女神

まさに、この中で「母」という存在は平和の具現化  
した姿、象徴であります。近年になり、この千年間に  
話を戻してみるとインドにいる神の一人にドウルガ  
という神がいます。これは、今まで毎年十月にドウ  
ルガを祝うお祭りが行われています。実はこの十月二  
十六日にドウルガのお祭りが終わりました。

このドウルガという女神は秋の奉納、耕した物とか  
食べ物の象徴の神であり、また、秋という暑くもなく  
さほど寒くもないという、一番いい季節の象徴でもあ  
ります。よいもの、よきものの象徴と考えられている  
女神です。

このドウルガ女神はまたお米の神様もあり、バナ  
ナの神様、あらゆるハーブの神様、春を象徴している  
神、母の神でもあり、大地を象徴する神でもあります。

母であり大地であるということで、大地はすべて、野  
菜であれ、果物であれ、主食であれ、そこから得られ  
るものとつながっていますので、本当に母なる存在と  
いいますか、母なる神というふうにいまでも愛されて  
おります。

彼女の旦那様はシーザーです。ドウルガは別の名前  
もたくさん持っています。ウーマと呼ばれたり、バル  
ヴァティとも呼ばれております。バルヴァティといふ  
のはバルヴァの娘という意味で、バルバットといふ  
のは山を意味します。この山といふのは非常に有名な、  
日本でも非常に愛されておりますヒマラヤのことです。  
だからドウルガは別名バルヴァティで、その名前が  
示すのはヒマラヤの娘ということです。その彼女が毎  
年秋になると人間の世界にやつて来てくれる。十日間  
ほど滞在される。つまりお盆のようなものです。

女神は人間の世界に戻つて来てくれて、阿修羅がい  
て人々を困らせていたりとか、あるいは、ほかの悪鬼  
が騒いでいろいろな問題を起こしているとなると、彼  
女はその問題にちゃんと対応してくれて物事をうまく

収め、十日目に安心して帰る。インドの人々は本当に、  
一家の娘のように彼女のことを見ています。

このような現象はヒンドゥーの中にのみ存在するも  
のだと思います。というのは、神、あるいは女神一人  
一人が本当に家族の一員という感じでとらえられてい  
るのです。その証拠に家族、私たちの名前も神や女神  
の名前にちなんでつけられた例がたくさんあります。  
そのドウルガが十日目に「さよなら」をする前に、  
その一家の一番長老である女性、母親はドウルガの彫  
像なり銅像のところへ行つて耳元で「そこと何かを  
ささやく。何かわかりますか?」「娘、また来年もちゃ  
んと帰つて来てくださいね」と、本当のお母さんがそ  
のドウルガちゃんにいうわけです。

ですから、こういうヒンドゥーの中での神、女神、  
あるいは聖なる神に対する信仰、あるいは信ずる思い  
は本当に家族としてのものなのです。

また、たくさんのリシは、これは聖者という意味で  
すが、たくさん神と話をしたり、遊んだり、ボクシン  
グをしたり、レスリングをしたりして、「お前はそんな

によくない。俺のほうがいい」というようにコミュニケーションというか、やり取りをするのです。そのように非常に密着しているのですが、別のもう一つの例として私たちの生活の中にあるものですが、その聖なる者一人に、ラーマクリシュナという人がいます。彼は八十年か九十年ほど前に亡くなっています。

### 三 結婚の形式

また結婚に関してですが、インドにおいては様々な結婚の形があります。まずはプラハマという結婚の形で、これはお父さんが娘にとって一番適しているという人を選んで、その人に、「この娘を嫁に」というふうにお話をする形の結婚です。

もちろん、彼本人がヴェーダ、神の意志をきちんとわかっているということがただし書きについています。そのヴェーダというのは教典です。その教えをすべて理解しているというのが条件です。

もう一つの形は、女性が僧侶と結婚をするという形

やんと目が覚めている状態で、寝ているなり薬でふらふらとなつているなりという覚醒していない状態で、男性がその女性をふつとさらつてどこかへ連れていくという形です。

インドという国は本当に大きな国で、その地域とか人、カースト、システムなどいろいろな違いによってこの八つの結婚の形が今まで行われているのです。

### 四 敬愛される母親、女性

今度は仏教のほうに少し話を進めますと、仏教においても、またジャイナ教においても、女性が宗教的な意味でも社会的な意味において一番高いレベルに置かれていることを示す数多くの証拠があります。

お釈迦様、ブッダですが、かなり頭の堅い頑固な人だったようです。彼自身女性をあまり好きではなかったようで、家族を捨てて出家したのですから、非常に頭の堅い方であつたように思います。

ご存じのように、釈迦が成道をするというときに村長さんの娘が釈迦のところにやつて来て、スジャータ

であります。これはダイヴィアと呼ばれております。もう一つ、アルシャという形もあります。この中では、男性のほうがお金なり牛なり何なり、自分が持つていれる財産を娘さんのお父さんに差し出してお願ひに行くという形であります。

プラジャパッティアというのが別の形です。それは、娘のお父さんが男性・女性両方に對して、幸せな生活、人生を送りなさい。それだけで終わるというものです。もう一つの形はアスーアと呼ばれるものです。このアスーアという形では、結婚する花婿のほうは花嫁のお父さん、家族、親戚、家族全部にわたって、彼のできる限りのお金をすべて差し出すという形です。

もう一つあります、ガンダルヴァという形もあります。これは日本で非常に人気を博している結婚です。これは、男性、女性、本人たちが相手を見つけて選ぶ。また別のものがありまして、ラクシヤシャという結婚もあります。これは、男性が無理やり女性を家からさらっていくというものです。最後、八番目ですが、パニシャチャというものがあります。これは、女性がち

という名前の娘さんですが、疲れた釈迦に食べ物をお供えすると、釈迦がふつと元気を取り戻す話があります。

彼女がつくつて釈迦に捧げた食べ物は、お米をミルクで炊いたおかゆだったのです。スジャータは本当に美しい女性でした。当時のインドのカーストの中では低い身分の女性だったのですが、とても美しい人でした。その後、釈迦はスジャータに恋をしてしまいます。というのは、彼女が母親のような存在になつたからです。

インドで、「世界で一番美しい女性はだれですか」と人に聞くと、「お母さんです」と答えます。ほかの国ではどうかわかりませんが、インドでは少なくともそうなのです。とにかく、釈迦はスジャータに恋をするわけですが、どういう種類の愛であつたかは私たちにはわかりません。しかし、少なくとも彼にとつては彼の眼を開かせるものであつたわけです。

というのも、事実、その後釈迦は女性に對して非常に優しくなりました。彼が後につくつしていく仏教教団

の中でも女性が認められるようになり、尼として入ることを許されまし、結婚していくても、たとえ未亡人であつても、彼の傘下に女性が入ることが許されるようになつたのです。

昔は、男性は外に狩りに出かけて女性は家にいる習慣がありました。家で女性たちは何をしたかというと、子供たちの面倒を見て子供たちにいろいろなことを教えていたのです。すなわち、女性は最も偉大な教師であるといえるのです。非常にクリエイティブなこともたくさんします。料理に始まって、いろいろな考え方を子供たちに教え込んだり、男性を大事にしなさいということまで、いろいろな教えを子供たちに与えていくのです。すべて家からスタートしました。

その中で女性は、非常にクリエイティブな最高の教師という存在だつたのです。私自身もこのように近代、いまの社会に生まれ育っていますが、例外なく母親から読み書きを教わり、またラーマヤーナ、マハーバーラタという何千ページにも及ぶものを教えてもらい、それはもう私が十歳になる前から、母が教えてくれま

した。あるいは、他人に対する接してどういうふうに接していくかとか、社会の中で人間としてどう振る舞うべきか、どういう言葉を話していくべきかも全部私は母から教わりました。英語も、二歳ぐらいのときに母親から最初に教わりました。母親が私の最初の英語の先生だったのです。

歴史上かなり昔から近代に至るまで、多くの有名な女性たちがいます。いろいろな種類の宗教の集団に入っている人たちであります。名前だけ申し上げます。シュリデヴィ、サラスワティー、これは日本語では弁財天です。ガンガ、これはガンジス川のことです。パルヴァティ、さつき言いました山の娘ですね。チャンディー、マハカリ、シャバリ、アハリア、シータ、ガンダリ。ずっと名前がたくさんあるのですが、より近年になりますサラダデヴィ。ヌールジャハンはインドの王様の妻であり、シャージャハンというタージマハールをつくった人の母親。ちなみに彼女はインド人ではなくて、いまのイラン、ペルシャから来た人です。また、これは近年ではないですが、キリストの母親の

マリア。それから、日本にも二回来られて私自身もお目にかかる機会がありました、マザーテレサがいます。このように、人類史何千年の期間にたくさんの人たちの名前をいま例として挙げましたが、もっともつとたくさん、女性がいかに尊ばれていたかを示している人たちがいます。しかし、この何千人もいる人の中でのノーベル平和賞をもらつた女性はマザーテレサ一人なのです。

このインドには、たくさんの、ニルヴァーナーという涅槃の境地に達したと言われている女性がおります。また、おりました。これまでの歴史の中で女神とてあがめられた人たちが実際にたくさんおります。同じことが、ジャイナ教、キリスト教、またシーカ教においてもたくさん見られます。インドに行かれる機会がありましたら、ぜひ、どこかでジャイナ教の寺院も一度お訪ねになつていただきたいと思います。

西部にアブという山がありますが、その山には本当にすばらしい寺院があります。これはすべて大理石でできておりまして夢のようなすばらしい寺院です。そ

こに彫られているいろいろな彫刻を見ていただきますと、男性・女性で彫られているのが夫婦ではなくて、教師と母親というつながりになつていて、本当にすばらしい寺院で、世界でも類のないものです。

したがつて、母親に対しても十分なる崇拝、あるいは威厳を捧げなかつた社会には、決して進歩・発展はありません。

この発展・進歩というのは、もちろんいろいろな方法、いろいろな角度から語ることができます。一つには物質的な進歩、そしてもう一つは精神的な進歩です。

私がここで母親に対しても十分なる崇拝を与えない社会が云々と言ふときには、精神的な豊かさ、精神的な進歩を言つております。先ほども少し言いましたが、ヒンドゥー、インドにいま住んでいる人々にとつて、宗教的なものは、日常の一挙手一投足の中にしつかり染み込んで、生活の一部になつています。

先ほど言いましたそれぞれの人の名前に始まつて、あるいは、物の考え方とか、あるいは、よく子供たち

がする遊び等においても、宗教の側面が本当に浸透しています。例えば、遊びの中でも、「君はラマ役」とか「君はクリシユナ役」というようにして遊んでいます。インドネシアもそうです。

インドネシアに私も行つたことがあります。ほぼ一〇〇%イスラム教の国ですが、そこでもラーマヤーナ

教が本当に生活の中に浸透しています。バリ島とかインドネシア等に行かれるとき、シャドープレイ、影絵と言ふのでしようか、そのシャドープレイの演劇がありますが、ストーリーもほとんどすべてラーマヤーナからとられたものです。

インドネシアの古典舞踊でガムランという音楽もありますが、それも全部ラーマヤーナから出ています。とにかく、インドは人口が十億人以上の国になつていて、印度亞大陸において、パキスタン、バングラデイッシュといまは分かれてしまっています。その分離してしまったときにたくさんのことが起きまして、今まで歴史の中で、この印度亞大陸に起きたことのなかつたようなことがその後はどんどん起きて、そ

れは分裂を決めてしまった人たちに対しても非常にショッキングな影響といいますか、結果を及ぼすものになりました。それがまさにインドの人たちの考え方を変えていきました。

## 五 インド女性の現況

すなわち、分かれた後のそれぞれの国のたどつた道のりを考えれば、本当にインドの人たち、特にインドの女性たちはいかに自分たちに対しても大きな自信を持ち、確信を持ち、自存の輝きをさらに光らせるようになつたかおわかりいただけると思います。現在に至つてインドの女性の活躍を見てみますと、たくさんの社会の分野で、たくさんの女性が活躍しています。教師や、あるいは大学の教授、作家、医者、あるいは芸術家、音楽家、哲学家、政治家、または科学者、あるいは裁判所の中の大司教であつたり、あるいはレスキュー隊を指揮する人であつたり、あるいはホームキーパーに始まって、たくさんの女性が警察や軍隊、空軍、海軍、エアラインのパイロットもおりますし、また、

議会で議員として活躍する人、大きな企業の中で重役や、あるいは、その役員として活躍する人。弁護士、または判事、そして首相も女性です。また、給料のレベルも男性と同等であります。ただ、まだまだ女性にとって不幸な習慣等も残つているのも事実です。例えば、ラジャスタンやカルナタカ、ビハールといった州では、夫がなくなると、その夫のお葬式のときに夫の遺体とともに妻は火の中に飛び込まねばならないという、サティーという習慣が残つていったりします。確かに非常にひどいことなのですが、これは八百年前ぐらいに端を発しており、イスラムがインドにやつてきたときからになります。ご存じのようにイスラムがインドにやつてきてその国を征服したのですが、征服者としてインドの女性を襲つたり略奪をしたり、いろいろな悪いことをしました。ですから、自分の夫がイスラムに殺されたときには、そんなことをされるならば夫と一緒に死んだほうがましだというところから始まっています。もちろん、そういう決まりがいまもあるわけではないのですが、習慣的に実行される場合があ

ります。

また、ダウリーという習慣もあります。これは、娘側が男性、夫になる人にたくさんのものを差し出さなければいけないという習慣ですが、これは、だんだんとなくなりつつあります。娘がたくさんいる家は破産してしまいますから、こうしたこともだんだんとされてしまいます。また、異なるカーストの間では結婚が許されていなかつたのですが、インターラストマリッジといいまして、カーストを越えた結婚も近年急速にふえてきております。私の家族にも、もともと私の家族のカーストはブラー・マン（バラモン）ですが、インターラストマリッジは私本人でありまして、カースト枠のない外国、日本の女性と結婚をしました。

妻を初めてインドに連れて行つたとき、私の父親が彼女に会つて即座に家族の寺院に連れて行きました。私の一族は本当に伝統的な大家族制度に基づいた大所帯でありまして、大きな家に子供たちとか召使いとか

たくさんの人々が暮らしているのですが、そこに彼女を初めて連れて行つて一週間ぐらいたったときに、私は若旦那で父は大きい旦那でしたので、その召使いの人たちが私に、「若旦那、一体どこであんなすばらしい吉祥天を見つけてきたんですか」と言うのです。インドのいろいろなところから出でてきている彼らは、低いカーストの人たちですが、まさに本当の地に足のついたインドの人たちなのです。そのインドの人が、吉祥天として彼女を本当に受け入れたわけですね。

もう一つ質問されたのは、「若旦那はバラモンですか」「そうだよ」「彼女もバラモンなんですか」といふことです。「いや、彼女は別の国から来たんだ。そんなものはないところから来たんだ」と。それで、「制度のない国から来ているけれども、でも、確かにそういう制度はないけれども、日本ではすべての人がバラモンなんだよ」というと、彼らは「なるほど」と感心をしてくれました。

最後に簡単なエピソードをご紹介して話を終わりたいと思います。ベンガル文学の有名な作家、ボノフー

ルの短編（実話）からの話です。あるベンガルの小さい村では、たくさん的人が「私の母親が亡くなりました。すぐに葬式に参列してください」というレターを受け取りました。

そのお葬式のレターを受け取った人たちはショールを身にまとつて、きちんとした喪服を着て会葬に行くわけです。そこには年老いたドクターですが、男性がその人たちを迎えて、「ありがとうございます」と挨拶をしていました。もう七十歳くらいの人です。

会葬に来た友人がドクターに、七十歳ですから、「ドクター、あなたの母さんがまだ存命だったとは知りませんでした」といいました。するとドクターは、「彼女はずっと元気でした。でももう今はいません。どうぞ拝んであげてください」といいました。

その家の裏のほうにみんな慌てて行きました。そこには一頭の牝牛が死んでいました。「私の母です」とドクターがいいました。

これはインドでの話です。インドでは牛肉を食べません。インドの人口の八〇%ぐらいの人がこういう村

に住んでおります。そこでは、ほとんどの家に牛が一緒に住んでいます。そして、牛乳を飲んで力をもらつてみんな大きくなります。

ガヴィマタといいまして、これは乳牛母です。母親

として大切に思うぐらいあがめている牛の肉を食べることはできない。でも、昔、ヒンドゥーのところでは、どこに行つても牛肉を食べられないようなところはなかったのです。

宗教的ないろいろな文献を見ても、牛肉を食べてはいけないということは書いてないし、もともとそういう教えは全然ないので。古い昔、本当に偉い教師の位の人たちというのは子牛を食べていました。だから、教師の役である聖者の人たちも子牛を食べていました。でも、子牛は食べても母牛は決して食べなかつたのです。以上で話を終わらせていただきます。

（サンディップ・K・タゴール／追手門学院大学教授）

（本稿は、二〇〇一年十一月二日に行われた講演内容に加筆いたものです。）